

二〇一三年度大学入試センター試験 解説〈現代文〉

第1問 評論（随筆） 小林秀雄「鐔」^{つば}

〔概要〕

今年度の第1問は、昭和を代表する批評家、小林秀雄（一九〇二～一九八三）の「鐔」が出典であり、例年のような硬質の評論文ではなく、随筆的評論文であった。本文の分量が増加（三六〇〇字→四二〇〇字）し、注も多く、心情や文学的表現を問う問題も出題されるなど、例年との違いに受験生はかなり戸惑ったと予想される。

全体が四つの部分に分かれ、「鐔」にうかがわれる実用性と精神性について筆者が考察していく文章であり、問6(ii)にもあるように、最初に主旨を表し、残りの三つの部分で具体的な話題を提示していく構成になっている。こうした構成も読み取りにくさを増幅させている。

設問別に見ると、問1の漢字は例年並みのレベル。問2は傍線部前後の本文には根拠が薄く、難レベル。全体の主旨が反映されていることがわからないと解けない。問3は基本レベルだが、問4や問5は文学的表現や随筆的な心情を問う問題であり、戸惑った受験生も多かったのではないかと推察される。問6は一昨年の形式に戻って「表現と構成」を問う2問に枝分かれした。

〔解説〕

問1 漢字問題

傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものをそれぞれ選べ。

昨年に続いて受験生の漢字力の有無が問われるレベルの漢字が並んだ。日本語は同音異義語が多いので、正確に文脈を踏まえ、漢字の意味を把握して欲しい。解答にあたっては、選択肢を「消去法」で正解にたどりつくことも可能だが、できれば自力で書ける力を付けておきたい。いずれにせよ、日頃から漢字に関して多角的な勉強を積み重ねておくことが望ましい。

(ア) 同僚

◎①官僚

②治療

③受領

④丘陵

⑤清涼

問2 応用

- | | | | | | | |
|-----|----|--------|-------|--------|------|--------|
| (イ) | 空漠 | ① 束縛 | ② 爆笑 | ◎ ③ 砂漠 | ④ 幕府 | ⑤ 麦芽糖 |
| (ウ) | 伴奏 | ◎ ① 同伴 | ② 繁華街 | ③ 搬入 | ④ 頒布 | ⑤ 重版 |
| (エ) | 空疎 | ◎ ① 疎遠 | ② 租税 | ③ 措置 | ④ 阻止 | ⑤ 塑像 |
| (オ) | 森閑 | ① 喚問 | ② 緩和 | ③ 勇敢 | ④ 歓喜 | ◎ ⑤ 閑散 |
- 正解 (ア) 1 ① (イ) 2 ③ (ウ) 3 ① (エ) 4 ① (オ) 5 ⑤

傍線部 A 「日本人の鐔というものの見方も考え方も、まるで変っていった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

この問題は、例年の問2、傍線部 A の問題とは質的に違っている。傍線部 A が意図する内容は、単純にその部分に書かれていることを超えて本文の主旨に関係するものだ。それは問6(ii)の、「本文の構成」が問われている問題を見れば明らかになる。

その意味で、問6(ii)の正解の選択肢①を先に見てみると、「この文章は、最初の部分が全体の主旨を表し、残りの三つの部分がそれに関する具体的な話題による説明という構成になっている」とあり、最初の部分が全体の主旨を表していることがわかる。

この文章全体を通じての主題は、「鐔」の持つ実用性(有用性)と高い精神性(文化的存在)にある。筆者、小林秀雄は最初に主旨を提示した後に、文章全体を通して、それを具体的に示していくのである。

具体的な解法としては、傍線部 A の後に書かれている内容を正確に追っていくことにつくる。まず「特権階級の標格たる太刀が、実用本位の兇器に変じた」とあるように、応仁の大乱以後、それまで「標格」(象徴)に過ぎなかった太刀が、乱世の戦いの場における「実用本位の兇器」となり、中でも「実用上、鐔という拵だけは省けない」とあるように太刀における「鐔」の実用性の高さが書かれている。

そして、人間は乱世の中でも文化を捜さなければ生きていけない存在であり、「止むに止まれぬ人心の動きが、兇器の一部分品を」「鐔に仕立てて行く」とあるように、「鐔」が実用の存在であるとともに文化的な存在として高い精神性を持つものに変化していくさまが書かれている。こうした内容こそが、応仁の大乱を境とした「日本人の鐔というものの見方も考え方も、まるで変っていった」という内容にあたる。選択肢を見ると、①がこの内容をすべて押さえていて正解。

●「鐔」の存在の変化

- 1 応仁の大乱以前は、特権階級の標格（象徴）に過ぎない刀剣の一部。
- 2 応仁の大乱以後は、乱世の戦いの場における「実用本位の兇器」の一部として必須の存在。
- 3 人間は乱世の中でどう在ろうとも、平常心を、秩序を、文化を捜さなければ生きて行けない存在であり、「止むに止まれぬ人心の動きが、兇器の一部分品を」「鐔に仕立てて行く」という意味での高い精神性を持つようになった。

この中で特に大切なポイントは3の内容。正解の選択肢①における、「乱世においても自分を見失わずにたかに生き抜くための精神性」という内容が本文に書かれていると解釈できるかどうかが勝負の鍵を握る。ただし、「平常心・秩序・文化」のことを乱暴に「精神性」とまとめてしまっているため、この選択肢の書き方にはやや疑問を感じる。

残りの選択肢を消去しておこう。

②は、前半部の「日用品としての」が×。また「身分を問わず」以下が本文に書かれていない。

③は、前半部に「標格（象徴）」の説明がなく、また後半の説明は「鐔」の武器としての実用性の高さについては書かれていても、「鐔」が人間存在と結びついた文化的な存在として高い精神性を持つものに変化していく様子についての記述が無いので×。ただし、単純に傍線部とその前後だけ読んで解いてしまうと③を選んでしまう可能性があるもので注意したい。前述したように、問6(ii)の全体の構成をヒントに、この傍線部Aに書かれていることが、全体の主旨に関係するものとわかれれば、③の説明では表面的な解説に過ぎないとわかって落とせるはずだ。

④は、後半の「乱世において」以下の説明が×。また、③で説明したように「鐔」の持つ本質的な価値についての説明も無い。

⑤は、後半の「戦いの場で士気を鼓舞するような」役割については本文に記述がなく、また、③で説明したように鐔の持つ本質的な価値についての説明も無いので×。

正解 ⑥

問3 基本

傍線部B「「どうも知識の遊戯に過ぎまい」という不安を覚える」とあるが、そこには筆者のどのような考えがあるか。最も適当なものを選び。

この問題は傍線部の前後を正確に読み、傍線部自体の意味をしっかり理解すれば解ける基本問題だ。

まず、傍線部Bの「どうも知識の遊戯に過ぎまいという不安を覚える」というのは文章としていくつか要素が抜けている。そこで、①『何について』、②『どうすることが』『知識の遊戯に過ぎまいという不安を覚える』のかを明らかにしていこう。

まず、①『何について』に関しては、直接的には傍線部Bの直前にあるように「この時代（戦国時代）の鐔の模様」に見られる「されこうべ」や「五輪塔やら経文」についてだが、もう少し一般化すると、傍線部Bの直後に書かれているように、「戦国武士達」と「仏教」との関係についてである。次に、②『どうすること』に関しては、傍線部Bの直前にあるように、「仏教思想の影響」というような簡単な言葉で片付け」ること、つまり、借り物の知識や机上の空論に過ぎない観念的な理屈で説明してしまうことを意味している。

そして、筆者はそうした「知識の遊戯」に不安を覚えているのであり、それとは対照的に、実際に琵琶の音を聞くことで「これなら解る」と感じていることが書かれている。つまり、観念的な理解ではなく、実体験を伴った理解が大切だということが筆者の考えだとわかる。

以上を踏まえて選択肢を見ると、⑤が正解だとわかる。

①は、後半の「説教琵琶のような」以下が×。筆者は何も当時の芸能に携われ、と言っているわけではない。

②は、全体的に×。戦国武士達にとつての仏教が「知的な遊びに富む」などとは本文に書かれていないし、右で説明した筆者の考えでもない。

③は、「文献から仏教思想を学ぶことに加えて」とあるところが×。こうした「文献」からの理解を筆者は観念的と呼んで否定しているのである。

④は、「鐔工や戦国武士達が仏教思想を理解していた」のが「浅はかな見方」という方向性自体がおかしい。ここで問題にされているのは、「戦国武士達」と「仏教」とがどのように結びついていたかを、知識の遊戯（観念）ではなく、実体験を伴って理解すべきだということなので、×。

正解 7 ⑤

問4 応用

傍線部C「もし鉄に生があるなら、水をやれば、文様透は芽を出したであろう。」とあるが、それはどういうことをたとえているか。最も適当なものを選べ。

今年度は第1問が随筆であるところから、こうした「比喩」問題が出題されたといえる。比喩は本来「小説」分野で扱われることが多いが、ここでは何がどうたとえられているかを正確に見ていこう。

筆者は「鐔」の面白さについて傍線部Cの5～6行前にこう書いている。「鐔の面白さは、鐔という生地が化粧し始め、やがて、見事に生地を

生かして見せるごく僅かの期間にある」。この表現自体、「鐔」が「化粧」をするという擬人法でたとえているものだ。

そして傍線部 C のある段落に入ると、具体的に「鐔」がどのように化粧をしていたかについて記述されている。

傍線部 C の前後を読んでいくと、「鐔」における装飾が、実用性を前提としながら美を追求していく様子が書かれ、それがあたかも植物の成長のごとく「堅牢と軽快」な鉄でできた鐔という土地にまかれた種が芽を出すように、日常の親しい物の形が鐔の文様となって現れてきたことが傍線部 C で比喩されている。その説明として正しい選択肢は②だ。比喩の理解を問う問題ではあるが、傍線部前後の説明と選択肢を慎重に照合していけば答えを絞り込むのはさほど難しくなかったはずだ。

①は、「鉄のみがその地金であり続けたこと」と結論付けている説明では、傍線部の比喩の説明になっていないので×。

③は、「長い伝統を反映して必然的に自然の美を表現する」の箇所が本文には書かれていないので×。また、①同様に傍線部の比喩の説明になっていない。

④は、後半の「生命力をより力強く表現した文様が彫られるようになっていったこと」のたとえではないので×。ここでの比喩は「生命力」のたとえではなく、「堅牢と軽快」な鉄でできた鐔に、日常的な形が文様となって現れてきたことのたとえである。

⑤は、「写実的な文様」であるかどうかは比喩するところとは無関係であり、またそれを彫り抜くことが可能になったことのたとえでもないので×。

正解 ⑧

問 5 標準

傍線部 D 「私は鶴丸透の発生に立会う想いがした。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを選べ。

筆者の「想い」の理由を説明する問題。これも前問に引き続き、随筆ならではの心情問題といえる。

傍線部 D は本文の最後の一文に引かれているので、そこに至るまでの経緯を押さえ、筆者の想いを明らかにしていこう。

あるとき、筆者は誘われて高遠城址に出掛ける。ここでは満開の桜が咲いていたにも関わらず、見る人はなく森閑としていた。さまざまなことに想いをめぐらせていた筆者が神殿の後ろの森を見上げたところ白い鳥の群れ（白鷺と五位鷺）が舞うのが見え、枝には鳥の巣があるのがわかった。そのうちにその白鷺か五位鷺かの一羽が下りて来て頭上を舞う姿をまざまざと筆者は目撃する。そして、その姿を見たときに筆者は「鶴丸透の発生に立会う想いがした」と書くのである。

以上の流れをつかんだうえで、選択肢を見ていこう。

①の「戦乱の悲劇」の記述は、本文の「信玄の子が討死した」と対応しているとみて○。「巢を守り続けてきた」は本文に明確な記述がないので△として通過するが、「この世の無常」「繊細な鶴」に関しては本文からは読み取れない。特に鶴の描写に関しては、本文で「両翼は強く張られ」「嘴は延びて、硬い空気の層を割る」と書かれており、「繊細」とは取れないので×。

②は、「武士達も太刀で身を守るだけでなく」以下がまったく本文の内容に反しているので×。後半の「優雅な文化」など何も関係ない。

③は、「生命を守ろうとしている生き物の本能」「鶴の対称的な形象の文様を彫る鶴丸透の構想を得た」など、本文に書かれていない内容なので×。

④は、「討死した信玄の子供の不幸な境遇」に関しては本文に記述はあるが、だからと言って「鶴をかたどる鶴丸透に込められた親の強い願いに思いついた」わけではない。

⑤が正解。前半部に書かれた筆者の置かれた状況説明は特に問題はない。途中の「常に緊張し続ける」とあるところが本文中に根拠が見出せないのと、「常に」が引っかけがここは△で通過。鶴の姿を「力感ある美を体現している」と書いているのは本文の描写と対応しており、そこから受けた感銘を鶴丸透の出現と重ね見る思いというのも筆者の心情説明としてぴったりくる。

この問題は、正解の⑤も一部キズがあるが、他の選択肢が確実に×になるので、「消去法」で解くのが確実だ。

正解 ⑨ ⑤

問 6

(i) 標準 (ii) 応用

昨年この問 6 は「論の展開に関する説明問題」ひとつであったが、一昨年は「文章の表現」を問う問題で(i)、(ii)の二つに分かれていた。今年度は一昨年の形式に復帰している。来年以降、どちらの形式になるかは不明だが、受験生としてはどちらの設問にも対応できる実力を付けておいてほしい。

(i) 波線部 X「現代人が、言葉だけを辿って、思わせぶりの文句だとか、拙劣な歌だとか、と言ってみても意味がないのである。」と、波線部 Y「だが、事実ではあるまいと言ったところで面白くもない事だ。」とに共通する表現上の特徴について最も適当なものを選べ。

波線部 X と波線部 Y とに共通する表現上の特徴としてすぐに気がつくことがある。それはそれぞれの文末を見ると、波線部 X「意味がない」、波線部 Y「面白くもない事だ」と筆者が否定的な言葉を強い言い切りの形で述べていることだ。そして、本文に戻ってみると、その否定の後、筆者は自分の意見を述べており、こうした「(一般論の) 否定→主張(強い自己肯定)」という形が筆者一流のレトリックであることがわかる。

ちなみに小林秀雄の文章は「男性的」と評されることがあるが、それは一刀両断的なこうしたレトリックからも見て取れる。

選択肢を見るとその説明になっているのは③であり、これが正解。

①は、「だけ」についての説明は理解できるが、「も」で「問題点が何かを明確にして論じようとする」と説明するのは無理があるので×。
②は、「はぐらかし」と説明しているが、ここでの筆者ははぐらかすことに力点を置いているのではなく、「こんなことを言ってもしよせん無駄だ」という一般論の否定にこそ力点があるので×。

④は、「消極的な評価表現」とあるのはまだ納得できても、それによって「読み手に不安を抱かせようとする」意図があるとは取れない。筆者にとって問題なのは、その後に展開する独自の自説の展開であり、そのための一般論の否定である。

正解 10 ③

(ii) この文章は、空白行によって四つの部分に分けられているが、その全体の構成のとらえ方として最も適当なものを選ぶ。

「内容合致」や「全体の構成」の解法としては、基本的に「消去法」で解くのが正しい。選択肢を客観的に把握するために、要素に分け、それを本文の内容や表現、そして全体構成と照らし合わせながら、正確に○×の判断をしていく。判断に迷う場合は△として通過しておき、二度目に最終決断を下すよう、慎重に解いていこう。

今回は問2との関係ですでに明らかにしたが、①が正解である。本来はこの問6(ii)の時点でそれが明らかになるのだから、見直しのときに全体に絡む問題として、問2と結びつけて考えられたかどうか勝負の鍵を握る。

この文章全体を通じての主題は、「鐔」の持つ実用性(有用性)と高い精神性にある。特に小林秀雄が「鐔」に「文化≠精神性」を見出していたことをつかむのが大切であり、その過程を具体的に示していく構成になっていることをつかめたかどうか確認したい。

②は、「起承転結」が×。「結論となる内容が最後の部分で示される」というのも完全に逆転した読みで×。

③は、「全体としてはそれらが並立するという構成」が×。なんとなくこの選択肢を選んだ受験生もいるかもしれないが、二つ目の部分以降の具体的な話題(体験)と、最初の部分の抽象性との間の質的な違いに気がついてほしい。

④は、「四つの部分」を「それぞれ異なる個別例によって論証する」とあるのが、完全な間違い。この文章は「鐔」というテーマについて書かれた一貫した文章である。

正解 11 ①

第2問 小説 牧野信一「地球儀」

〔概要〕

牧野信一（一八九六～一九三六）の小説「地球儀」の全文が出典。牧野信一は第1問の小林秀雄とも交流があった作家で、幻想的な作品を多く書いた。今回の作品は、いわゆる「私小説」であり、父や母に対する「私」のアンビバレントな（両義的な）感情を描いたもの。作中に「私」の描いた「地球儀」という書きかけの短篇小説が挿入されることで、主人公の内面が重層的に浮かび上がるように構成された作品になっている。センター試験小説問題としては標準的な内容・分量であるが、主人公のおかれた立場や状況を理解し、人物関係や心情を的確にとらえるのはやや難しい文章であった。

設問別に見ると、問1の語句は辞書的な意味が正解であり、標準的。問2は基本レベルだが、問3～問5の設問は、本文に直接解答の根拠があるというよりは、選択肢を読み、消去法で解いていかなければ正解できない問題であり、やや難。問6の文章の表現に関する設問も、二つとも正解するのは容易ではなかったはずだ。

〔解説〕

問1 語句問題 (ア) 基本 (イ) 標準 (ウ) 基本

傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ選べ。

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターンである。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日頃からいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。下手に文脈に戻して判断すると間違える可能性がある問題が出題されている。

(ア)の「愛想を尽かしていた」というのは「相手に対して好意や信頼がもてなくなること」なので、ここでは①「嫌になってとりあわないでいた」が正解。「愛想（あいそ・あいそう）」は「好感をもたれる言葉遣いや表情など。人を喜ばせるための言葉や振る舞い」のこと。

(イ)の「間が悪かった」は、「きまりが悪い。運が悪い」の意味だが、選択肢を見ると⑤の後半の「気まずかった」しかピッタリくるものがない。前半の「正直に言うのが」の部分が正しいかどうかだが、直前に「そんな気はしなかったが」とあるので○。

(ウ)の「気概」は、④「くじけない強い意志」で問題なし。他の選択肢はまったく該当しない。

正解 (ア) 12 ① (イ) 13 ⑤ (ウ) 14 ④

問2 基本

傍線部 A「如何にも腹には確然とした或る自信があるような顔をした」のはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを選び。

最初の傍線部問題であり、心情にからむ理由説明問題なので、小説の場面や状況、人物関係などをしっかり把握してから解答するようにしたい。

●心情が問われる問題でも、まずは客観的な要素（状況や場面設定・人物関係・人物や風景描写など）を本文で押さえ、それらが矛盾している要素を含む選択肢を消去する。

傍線部 A にいたる流れをつかもう。

祖父の十七年の法要のために二ヶ月ぶりに実家に帰った「私（息子）」に対して、母が怒りの言葉をぶつけてくる。その理由としては、まず放蕩癖のある父がもうあてにならないことと、いつまでたってもお金のかかる無能な息子の存在に業を煮やしているからだとわかる。それに対して息子である「私」は、父（からもらうお金）なんかあてにしていけないから「勝手にするがいいさ」と「おこったような口調で呟く」わけだが、それはあくまで強がりの姿勢に過ぎない。

こうした流れがつかめれば、傍線部 A「如何にも腹には確然とした或る自信があるような顔をした」の理由説明として正しいのは②だとわかる。要するに、母が放蕩癖のある父とお金のかかる息子の両方に対しても面倒見切れないと怒っているのに調子を合わせて、もはや父からのお金の援助は必要ないと強がってみせたというのが傍線部 A の理由である。

①は、「父の高圧的な言動」というほどはつきりしたものが本文に示されていない（あくまで母を介して父の言葉が伝えられているに過ぎない）うえに、「母の期待に応え」ているわけではないので×。

③⑤の前半部分に書かれている内容は、いずれも放蕩癖のある父に対して、手段や確信や良案を持っているとあるが、傍線部 A の「或る自信」というのは、「親からお金をもらわなくてもやっていけるという私の自信」であり、そこが押さえられていない点が決定的に間違っている。

正解 ②

15

問3
標準

傍線部B「突然テレ臭くなって慌てて母の傍を離れた」のはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを選び。

この傍線部Bにいたる過程において、「私」の書きかけの短篇小説が挿入されている。『』でくくられた部分であるが、けっこうな分量があるので、読解していく上で混乱をきたした人も多かったのではないだろうか。

センター試験で出題される小説は、こうした過去のエピソードなどの挿入や、時間の逆転、急な場面転換などが行われているものが多く、それによって登場人物の心情も大きく変化する可能性があるので、日ごろから意識して正確な読解を心がけておいて欲しい。

挿入された短篇小説に描かれている内容は、祖父と孫が「地球儀」を前にして、アメリカに行ってしまった父のこと（祖父にとっては自分の長男）を思う心情がテーマになっている。

今回のような理由説明問題の場合、結果にいたる原因の箇所を正確にとらえるのが大前提になる。因果関係には大きく次の二つのパターンがある。

●因果関係

- 1 原因→結果 いわゆる順接の関係で、評論では「したがって」「だから」などの接続語で結ばれる場合が多い。
- 2 結果→理由説明 先に結果を述べておき、後で「なぜなら～だから」という形で説明するもの。

傍線部Bは場面転換の直前に引かれているので、因果関係の1のパターン、つまり直前までの流れが大切になる。そこで、傍線部Bにいたる流れを整理しよう。

- 1 母が「私はもうお父さんのことはあきらめたよ。家は私ひとりで行くよ。」と堅く決心したらしくきっぱりと息子である「私」に語る。
- 2 それに対して「私」の反応としては、「たあいもなく胸が一杯になった」が「口惜しさの余り」、常軌を脱した妙な声で「（父なんて）帰らなかつたっていいや」などと口走る。
- 3 しかし、先ほど挿入されていた書きかけの小説のことを思い出して、「突然テレ臭くなって慌てて母の傍を離れ」てしまう。

こうした母と息子のやり取りと、そこに書かれている心情描写を正確に読み取れば、どうして「突然テレ臭くなって慌てて母の傍を離れた」のかの理由は明らかになる。

まず1↓2の流れでは、放蕩癖のある父を見捨てて家を一人で支えていく決心を固めた母の覚悟に対して、息子としては思わず胸が一杯になり、母に同調して父なんてもう帰らなくていいやと口走る。しかし、その後の3でわかるように、「私」は書きかけの短篇小説で不在の父に対する思いを綴っており、先ほどの母に同調したのとはまったく逆の、父への愛情というものを思い出してしまふ。その矛盾から「私」は「突然テレ臭くなって慌てて母の傍を離れた」のである。

こうした矛盾した心情が交錯するのは小説では多くあることであり、それをアンビバレントな（両義的な）感情と呼ぶが、センター試験小説問題では必ずといっていいくらい設問対象になる箇所である。

●登場人物の矛盾するアンビバレントな（両義的な）感情の箇所は設問対象になるので、その二つの感情を正確に把握することが大切。

こうした「私」の心情を正確に説明している選択肢は④である。単純化すれば「母と父との間で揺れ動く感情的な自分を恥ずかしく思った」というのが理由だ。

①は、前半はいいとして、「今後も父親からの金銭的援助をあてにしている自分を思い出し」の箇所が×。ここは挿入されている短篇小説との関係、つまり父に対する思いが母への思いと矛盾することが恥ずかしさの理由であることをつかむことが大切。

②は、「母に同調せざるを得なかった」とあるところが×。「たあいもなく胸が一杯になった」とあるように、母への同調は自然で内発的なものである。また、後半の「経済的に自立できていない」ことは、ここでは理由としては不適。

③は、事実として本文中で「母を支えていくと宣言」などしていないので×。「夢想がちであった」以下の内容もズレている。

⑤は、短篇小説の内容説明が間違っているうえに、後半の「いつまでも周囲に媚びる癖の抜けない自分」というのも本文に根拠がない説明になっており、×。

正解

16

④

問4 標準

傍線部C「『ハッハッハッ……。まさか——』と私も叔父に合せて笑ったが、笑いが消えないうちに陰鬱な気に閉された。」とあるが、このときの私の心情の説明として最も適当なものを選び。

心情説明問題ではあるが、選択肢が3行と長く、場面や状況の説明なども含めて矛盾の無い選択肢を選んでいくようにしたい。

ポイントになるのは「私」と叔父との会話のやり取りをどう判断するかだ。「私」が叔父に今更ながら父のことを尋ねるのだが、そこには「私」の父への複雑で微妙な心情が隠されている。それに対して叔父の返答は、曖昧であり、何か含みのあるものだった。さらにはつまらない冗談を言って笑って終わりにされてしまうのだが、「私」のほうも叔父に合わせて一緒に笑いながら、最後には「陰鬱な気に閉され」てしまう。

こうした流れから「私の心情」を説明するのは容易ではない。自分なりに解答を用意したところだが、ここは3行ずつある選択肢を精査しながら消去法で解いていくのが正解だ。

①は前半部分はいいとして、後半の「叔父以上に父のことを見下している母にも落胆している」の箇所が本文の内容とは合わない。この場面では「私」が陰鬱な気になるのは母とは無関係なので×。

②は、「母と調子を合わせるように」失望した」の箇所が本文からは読み取れないが△で通過。後半の説明は傍線部Cの内容をうまく説明しており、「私」の心情としても「自己嫌悪」というのは的確な表現なのでキープしておく。

③は、「評価してほしかった」という気持ちは「私」の発言や描写等からはうかがえない。また、最後の「嫉妬」も本文にはまったく書かれていない心情なので×。

④は、なんとなく正しいと思ってしまっただけで選んでしまう人が出てくる可能性がある選択肢なので気をつけてほしい。ここで「私」の心情として、「叔父に理解してほしくて」質問したという読みをするには、本文には根拠が見当たらない。また、後半の「祖父の悲しみ」以下の内容も本文には何の根拠も示されていない説明になっているので×。

⑤は、「父のことを叔父と共に責めよう」と思ったとは取れないし、最後の「母もまた自分の立場を守ってはくれないだろうと悲観的になっている」もおかしい。ここでは母との関係において陰鬱な気に閉ざされたわけではないので×。

以上の「消去法」から、キープしておいた②が正解として浮かび上がってくるが、選択肢の正確な精査が必要なので、日頃から選択肢を要素に分け、本文と照らし合わせてスピーディーに○△×を判断するように訓練しておいてほしい。

正解

17

②

問5 応用

傍線部 D 「自分で自分を憐れようと思いがして、そのまま言葉を吞み込んでしまった」とあるが、このときの私の心情の説明として最も適当なものを選べ。

傍線部の直前に、「またあの『お伽噺』を思い出すと」とあるように、途中に挿入された書きかけの短篇小説のことが思い出された「私」は、地球儀をめぐる母との会話の中で、自分の少年時代のことを思い出してしまふ。そのことが「自分で自分を憐れようと思いがして」につながったため、母に対して「言葉を吞み込んでしまった」のである。

ここでのポイントは、「私」の父への複雑な思いにある。問3でも説明したように、「私」の父母への感情は矛盾するアンビバレントな（両義的な）感情といえる。一方では、放蕩癖のある父に対する憎しみ（≠それは同時に「母への同調」になる）を持ちつつも、もう一方では父を慕う温かい想いを持ってしまっている。その矛盾する二つの心情の象徴になっているのが「地球儀」なのである。

● 「地球儀」 ≡ 「私」にとって父を慕う温かい想いの象徴

≠ 息子・英一が遊び道具として使って、いずれ自分を父として慕ってくれることになるかも知れない象徴

⇔ 矛盾する感情

● 「地球儀」 ≡ 放蕩する父への憎しみの象徴

≠ 母にとっては目障りに過ぎないもの・「私」も母へ同調する部分もある

こうした「私」の心情を整理してみると、正解は①だとわかるが、この問題も問4に続いて3行もの選択肢が並ぶ問題なので、選択肢を要素に分けながら正確に○△×の判断をしていきながら「消去法」で解いていこう。

①は、先ほど整理した「私」の心情をすべて説明しきっていて正解。地球儀を「父への愛憎半ばする複雑な想いの象徴」としており、また息子がいずれ自分を慕ってくれるかもしれないという説明も○。最後に言葉を吞み込んでしまふ理由としても「身勝手な想像をして気恥ずかしさを感じている」という正しい説明になっている。母の手前、父への愛や、いずれ自分が息子から慕われる想像をしているなど、とても言えない立場にいるのである（「私」はまだ親からお金をもらっている放蕩息子なので）。

②は、地球儀は「家族との絆」ではなく「父の象徴」でなければならない。後半の「過剰に気負い立つ」以下も本文に根拠が示されていないので×。

③は、②同様に地球儀は「家族の記憶の象徴」ではなく、「父の象徴」でなければならない。また、「息子にも」以下の説明がまったく「私」の心情説明としてズレているので×。

④は、「家庭的に恵まれなかった」以下の説明が×。この説明では「私」の父への愛情部分の心情説明が欠落していることになる。前述したように、このときの「私」の心情の最大のポイントは父への相反する思いなので、「愛憎半ば」という説明になっていなければならない。

⑤は、「自分の目指すべき世界を指し示し続けるもの」が×。それではまさに父の二代目になってしまふ。また、後半の「自負に満ちた期待」も言い過ぎで×。まだまだ親のすねをかじっているような「私」が、そこまでの自負心を持てるほど自立した大人になっているとは解釈できない。

正解 18 ①

問 6 標準・標準

この文章の表現に関する説明として適当なものを二つ選べ。

新課程になってから、小説の最後の問題はこうした「表現の特徴」や「叙述の説明」について問うものが連続して出題されている。昨年同様、今年も正解を「二つ」選ぶ形式になっている。

解法としては、選択肢を要素に分けて○×を付け、基本的に消去法で解くのが確実。また、選択肢同士を比較して解くという視点も有効だ。一つずつ選択肢を見ていこう。

①は、二つの場面の「どちらの場面も一人称を使って語られる」とある箇所が×。短編小説の場面では、主人公に当たる息子のことを「彼」という三人称で語っている。

②は、前半から中盤にかけては特に問題ないので○。問題は後半の「その場しのぎの態度で応じがちな私の性格が表されている」の要素だが、はつきりいってこれは○か×かの判断は難しい。こういう場合は、とりあえず②を残して次の選択肢に移動しよう。

③は、本文中に多用されている「――」と「……」についての解説だが、「それぞれの役割に応じた使い分けがなされている」というほど厳密な使い分けがされていない。会話中でも「――」が何度も出てきて間を表すなどしているので×。

④は、短編小説の引用についての説明だが、この選択肢の内容が正解であることを理解できれば、「私」の父や家族に対する「重層的」な思いが理

解できるはずだ。問5で見たように、「私」の父への思いは愛憎半ばする「重層的」なものであり、それは同時に問3での母に対する「テレ臭い」態度にも反映されてくる。この選択肢を正解として選ぶことができた受験生であれば、他の問いと連動させて読解できれば、全体の得点をアップさせることができたはずだ。

●「表現の特徴」「叙述の説明」や「内容合致」問題の正解の選択肢の内容は、他の問いのヒントになる可能性が高い。最後まで解き終わったら全体をもう一度俯瞰して眺め、関連する問いがあれば結び付けて有機的に解きなおすという作業は非常に有効だ。

⑤は、後半の「初歩的な英語すら満足に話せない母」以下の内容が本文からは読み取れない内容なので×。父と母の対比や隔たりの比喩としてカタカナで英語が表現されているわけではない。

⑥は、最後に「祖父の法要での前後三日間と挿入された短篇中の時間との区別を曖昧にしている」とあるのが誤り。最後の一箇所だけが現在形になっているのは、ひとしきり小説が終わった後、筆者がひょっこり顔を出して息子の英一のことを現在形で紹介して注釈を述べているだけであって、小説全体の中で「時間の区別を曖昧にしている」という意図は読み取れない。

以上から、残っていた②と、ズバリ内容的に正しい④が正解となるが、

●「表現の特徴」や「叙述の説明」で二つの正解を選ぶ場合、一つはすぐに正解とわかる場合が多く、もう一つの正解はすべての選択肢を消去法で確認した後、残ったものを選ぶという手順を取る。

ここでは、④は内容的にすぐに正解として選べてほしいが、②を選ぶには他の選択肢を消去法で×にしてからでないと難しい。

正解 19・20 ②・④ (順不同)